

1日目 交流会・シンポジウム

オリエンテーション・交流会

- 10:00～10:05 主催者挨拶 池永肇恵（内閣府男女共同参画局長）
- 10:05～10:20 プログラム説明・シンポジウムの趣旨説明
小川佳子氏（アイ・シー・ネット（株）シニアコンサルタント）
- 10:20～11:10 プログラム参加者の交流（1人1分プレゼン）
- 11:10～12:30 交流・昼食
- 12:30～13:00 休憩

第1部 シンポジウム

- 13:00～13:05 開会挨拶 今井絵理子（内閣府大臣政務官）
- 13:05～13:15 シンポジウムの趣旨説明及び招聘者の所属メディアに関する調査報告
金廣純子氏（アイ・シー・ネット（株）シニアコンサルタント）
- 13:15～15:00 パネルディスカッション
テーマ： 「女性記者の活躍と未来」
モデレーター： 林香里氏（東京大学大学院情報学環 教授）
パネリスト： 久米井彩子氏（NHK 日本放送協会 報道局国際部記者）
治部れんげ氏（フリージャーナリスト、東京大学大学院情報学環客員研究員）
武田耕太氏（朝日新聞社 科学医療部記者）
クエック・エン・ラン・オードリー氏（シンガポール/ストレーツ・タイムズ紙 編集部 国際担当論説部長）
トゥイ・グエン・トゥー氏（ベトナム/ベトナム女性新聞 経済ニュース部副部長、編集補佐）
- 15:00～15:20 休憩

第2部 意見交換会

- 15:20～16:30 各国の女性記者と一般参加者による意見交換（グループディスカッション）
- 16:30～16:40 閉会挨拶
- 16:40～16:50 アンケート記入

第3部 国際交流

- 17:00～18:00 参加者全員による交流会

※第1部～第3部には、プログラム参加者に加え、一般参加者 54 名が参加した。

今井絵理子 内閣府大臣政務官 開会の挨拶

本日は、シンポジウム「アジア・太平洋地域の輝く女性達の Hasshin!～メディアが創る新しい時代」にご出席いただき、誠にありがとうございます。内閣府では、2016年からアジア・太平洋諸国と日本の懸け橋となる女性の知見、そして経験を共有するために交流を深めてまいりました。これまで両地域で活躍する女性起業家の皆さんにお集まりいただきましたが、4回目となる今年は、メディアで活躍される女性記者の皆さんにお集まりいただきました。

人々の意識に大きな影響力を持つメディアにおいて女性が活躍し、報道に関わる意思決定に女性の参画が進むことは、とても大切なことです。テーマはHasshin!です。メディア業界において女性が、更に前に進むというHasshin（発進）と、女性の視点で、様々な課題や考え方を伝えていくというHasshin（発信）という、二つの意味があります。

本日はメディアで活躍されている方、そして、これからメディアで仕事をしたいと考えている方々にご参加いただき、意見交換が行われます。この機会を通じて女性活躍社会の実現に向けて、メディアができること、メディアだからできることなど、多くの気付きを得ることができれば素晴らしいことだと思います。そして最後になりますが、今日の学びを世界にHasshin!していただけると幸いです。



パネルディスカッション 要旨

概要：

パネリストに国内外の女性記者と男性記者を迎え、ライフイベントとキャリアの振り返りや、自身が報道してきた代表的な記事の紹介を通して、その取材理由、取材過程から、自身を取り巻く環境や仕事のやりがい、今後のキャリアの展望、抱負などについて共有した。加えて、メディア業界における女性の活躍によって、メディア業界はどのように変わっていくか、またそれによって社会にどのような変化を与えるかを議論した。

パネリスト：

久米井彩子氏（NHK 日本放送協会 報道局国際部記者）

治部れんげ氏（フリージャーナリスト、東京大学大学院情報学環客員研究員）

武田耕太氏（朝日新聞社 科学医療部記者）

クエック・エン・ラン・オードリー氏（シンガポール／ストレーツ・タイムズ紙 国際担当論説部長）

トウイ・グエン・トゥー氏（ベトナム／ベトナム女性新聞 経済ニュース部副部長、編集補佐）

テーマ①「パネリストにおけるキャリア形成とライフステージについての経験の共有、及び企業内での昇進等に関する議論」

久米井氏：

- ▶入社後の給与や昇進は男女平等だが、子供を持つなどライフサイクルの変化によって、現場に駆けつけられないなど、今まで通りのコミットメントが難しくなり、管理職への昇進が難しいという面はある。
- ▶しかし近年、徐々にワーキングマザーの働き方を理解し、受け入れようとする男性も増えてきている。

オードリー氏：

- ▶女性がワーク・ライフ・バランスを図るには、三つのS：ステート=国の支援、ソーシャル=社会の支援、ソーシャルノーム=社会の規範が重要。
- ▶現在シンガポールでは、男女ともに産休・育休は取れるが、キャリアや周囲からの評価を考慮して、取らない人もいる。国の支援だけでなく、社会の規範も重要で、これが後押しになっていく。

トウイ氏：

- ▶私たちの会社は女性専門のメディアなので、女性の社員が50パーセント、また女性の管理職が60パーセントと、他の人に比べて特殊な環境にある。
- ▶当社では、記者や編集者対象のジェンダートレーニングが行われている。社会の規範の中にあるジェンダー・ステレオタイプが、ジャーナリストが意識せずに書いた記事に反映されてしまうこともあるからだ。

治部氏：

- ▶私が就職活動をした1996年頃は、ジェンダーで職種が決まっている会社も多く、当時の女性の上司や、出産後も仕事を続けている女性はとても優秀で少数だったため、私には両立は無理だと思っていた。

▶女性の方が家事や介護などのケアに責任を負うことが多いため、昇進を難しくしている現状にあるが、これから男性もケアの世界に入ってくることで、変わっていくのではないかと。

武田氏：

▶39歳で結婚するまで仕事中心の生活をしてきた。現在2歳になる子供が生まれたとき、6カ月の育児休暇を取り、その後1年間の単身赴任も経験。今は家事育児優先の仕事の仕方をしている。

▶人事評価が、記事だけでなく働く時間の長さなど組織への貢献度で評価されがち。自身が育児との両立を経験し、大変さが身に染みた。両立できずキャリアを諦めた女性も多いのではないかと思うと、惜しい人材をなくしていると思う。

テーマ②「これまで取材した代表的記事、その取材理由、取材過程、自身を取り巻く環境・やりがいの共有」

久米井氏：『「ニッポンの働き方 変ですか？」外国人の人に聞いてみました』について

▶様々な国を見てきた外交官たちが、日本の働き方について話し合った番組である。

▶日本の仕事現場は男性が多い、日本人は労働時間で評価されるから働きすぎだ、女性の社会進出は男性の地位を脅かすと思っている男性が多いようだ、というのが皆さんの感想だった。

▶意識=アンコンシャス・バイアスから抜け出して、男女ともに人生を生き生きと過ごせる社会をどう築けるかについて、皆さんにも考えていただければという思いで番組を作った。

武田氏：『「イクメン」 どう思う？』について

▶同じぐらいの子供を持つ男性の同僚と、父親をしながら働くなかで感じる「父親のモヤモヤ」を発信する企画を立上げ、「イクメン」をどう思うか、識者の見方も交え読者に問いかける記事を書いた。

▶私自身、育休中にイクメンと褒められ、自分が子育てしているのに妻の添え物のような感覚になった。一方、復職すると長時間労働に戻ってしまい、なぜ当たり前で育児ができないのかと悩んだ。

▶記事に対する読者の反応は、イクメンという言葉は嫌いという人が7割以上だった。識者からは、仕事も家事育児もという父親像が強調される一方で、仕事では考慮されないという都合のよい社会が残っているという指摘があった。

トウイ氏：ベトナムの地方の女性コミュニティ・リーダーの記事について

▶女性のリーダーシップの重要性について意識を向上させ、男女の役割の意識を変えたいと思い、2人の女性リーダーが、ある村で新しいスタイルの農村地帯を作っていることを紹介した。

▶彼女たちの夫らは、妻のキャリアの追求をサポートしている点が興味深い。ベトナムでは、男性優位の考えが根強く、女性がリーダーになることの障壁となっていたが、近年は変化が見られる。

▶他の女性が積極的に地域社会で役割を果たすようなきっかけを与えるために、記事を書いた。

オードリー氏：男子学生が女子学生のシャワールームを盗撮していた事件のその後について

▶盗撮した男子学生は、将来有望なキャリアに傷がつくからと1学期だけの休学とされ、起訴もされなかった。被害者である女性の権利と、測定できない男性の将来のバランスが大きな議論となった。

▶また、スマホなど技術を乱用する人には、罰則や新しい法律が必要であり、ジェンダーバランスを達

成するためには何が必要か、政治家を含めて意識を高め、考えていかなければならない。

治部氏：「安倍首相、『シングルマザー特区』が必要です！」について

▶2015年に、岩手県盛岡市でシングルマザーの貧困問題に対しNPOを作り、シングルマザーの就労支援を行っている女性取材した。

▶同年、日本政府が主催している国際女性会議WAW!のアドバイザーをしていたため、彼女に会議に登壇してもらったところ、話を聞いた当時の厚生労働副大臣が動いてくださり、様々な制度の改善につながった。書いた記事を政策の改善につなげていくことは、とても大事だと思う。

○テーマ③「メディア業界における意思決定層への女性の参画による報道や社会への影響について」

久米井氏：

▶意思決定層に女性が増えることによって、組織運営の在り方が変わり、組織内の活性化につながる。

▶ただ、女性だけの問題ではなく、女性と男性の問題という意識で考えていかなければいけない。男性の理解も不可欠で、男性が女性の置かれている立場を理解することも大事。

武田氏：

▶女性が紙面決定の場に加わることで、政治、経済、国際といった分野に偏り過ぎず、家事育児、医療介護のような生活に関わるニュースが、もっと前面に出てくるのではないか。

▶自分とは違う立場に想像力を働かせて記事を書き、紙面化していく作業は記者として不可欠な要素。

トウイ氏：

▶私の会社では、女性の声を記事に反映させるため、各記事には女性の情報源が必要という規則がある。

▶女性がニュースルームの代表者であることにより、ジェンダーのステレオタイプに挑戦できる。

▶ジャーナリストを志望する人、キャリアを目指す人にとって、大切なロールモデルである。

オードリー氏：

▶香港の特派員は妊娠6ヶ月だが、自ら希望して暴動取材を行い、彼女は素晴らしい仕事をしてくれた。

▶その一方で、活躍する女性が増えると、子供と休暇を過ごしたい女性や、母親の面倒を見なければいけないシングル女性もいる。どちらもジェンダーの問題。こうした課題に対応していく必要がある。

治部氏：

▶他国と比べて単純に数字を見たとき、今の日本は、リーダーシップに就く女性の割合、とりわけメディア業界におけるそれがあまりに少ない。女性の頭数が少な過ぎる。

▶女性の存在によって、ジェンダーやケアの問題に関心を持つ男性が、その関心を言いやすくなる。

林教授によるコメント要旨

本日紹介してもらった記事は、いずれも日常生活での個人の話や社会や制度につなげていくという視点で執筆されています。記者、プロデューサー、ディレクターなどプロの方たちの腕の見せどころと言えます。難しいのは、そのような記事の執筆を後押ししてくれる上司がいるかどうかです。

女性の頭数を増やすことも非常に重要である一方で、日常の細かなことに敏感な人たちが増えることも重要です。女性を増やせと主張すると、男性から大きな反感を買うことがあります。でも、女性的と

いうか、日常生活の視点を大切にしたい記事を増やしてほしいと主張することは、もう少しやりやすいかもしれません。日本の場合、ジェンダーの議論に慣れていないトップの男性が拗ねないように、戦略的な方策と実質的な議論をうまく使い分けて行く必要があると思います。

一方、社会では、介護や育児といったケアの仕事が依然としてあり、これらの仕事は、通常は女性に負担がかかるのが現状です。会社や組織の内部では、独身の女性達に負担のしわ寄せが来るともあります。すると、しばしば女性の間でさえ対立が起こります。こうした一見すると女性同士の対立と見える状態も、実は男性中心社会が原因であり、女性達へ責任転嫁することがないようにして欲しいのです。

また、あらゆる政策や支援対策には、社会的な規範や倫理が深く関わっています。そして、この社会的規範や倫理への合意形成には、やはりメディアの影響が非常に大きいのです。ぜひ、メディアの皆さんが、日常生活の感覚を失わず、頑張っていて欲しいと思います。

グループディスカッション

パネルディスカッションの内容を受け、プログラム参加者と一般参加者が小グループ（8グループ）に分かれ、「女性とメディア」について共に考え意見交換をした。

○テーマ

メディア業界の女性の活躍が社会に与える影響や報道の変化を踏まえ、これからのメディアはどうあるべきか、その中で女性記者の役割、働きがいとは何か

○手法

手順1 プログラム参加者が以下の3つの小テーマについて、自身の経験を交えながら考えを提示した。

- ① 女性の活躍が与える報道の変化と社会への影響とは？
- ② これからのメディアの在り方とは？
- ③ 女性記者の役割と働きがいとは？

手順2 一般参加者がプログラム参加者へ質問した。なお、一般参加者はシンポジウム参加にあたり、自分自身があてはまる分野を以下から一つ選んでいる。

- ① メディアで働いている
- ② メディア勤務をめざしている
- ③ メディアに関心がある
- ④ 男女共同参画に関心がある
- ⑤ その他

以下、**手順1**で提示された小テーマごとのプログラム参加者意見、そして**手順2**一般参加者からの質問を分野ごとに整理して報告する。



手順1で提示された小テーマごとのプログラム参加者意見（抜粋）

① 女性の活躍が与える報道の変化と社会への影響とは？

- ▶ ニュースルームに男女両方がいることで、より多様な人材が新聞やテレビで幅広いトピックを伝えることが可能になる。
- ▶ 女性が様々な意思決定プロセスに参加できれば、より良い政策を作ることができる。女性目線の情報や意見を意思決定プロセスで活用していく必要がある。
- ▶ メディアは事実を報道するだけでなく、事実を分析し、取り上げた課題について世論を形成することができる。その点で、ジャーナリストはオピニオンリーダーとして、ジェンダー平等促進に向けて役割を果たすことができると思う。
- ▶ 心の機微を取り上げるドキュメンタリーは、女性のほうが得意だと思う。女性記者が増えると、社会制度や政治など難しい話を違った視点からわかりやすく伝えることができると思う。
- ▶ 男性が女性を支援することが珍しいことではない、女性と男性が支援し合う必要があるということを理解してもらおう機会になる。

② これからのメディアの在り方とは？

- ▶ メディアには三つの重要な役割がある。ギャップを指摘すること、ロールモデルを提示すること、ジェンダーセンシティブな報道をすることである。女性政治家は何を着ているかが話題になり、加害者でなく犯罪被害者が詮索されるなどの報道の仕方自ら問う必要がある。
- ▶ ジェンダー課題について理解するために日本人はもっと他の国について知るべき。そのためにも私達がジェンダー平等について取り上げねばならない。
- ▶ メディアに関わる人達は、メディアは影響力を持ったパワフルな存在であることを理解する必要がある。どのように効果的、戦略的、客観的に目的を達成するかについて理解するべき。
- ▶ もっと多くの女性記者がコンテンツについて意識する必要がある。子供向けの本や教育システムの中で、女性は主婦として描かれることが多い。
- ▶ セクシャルハラスメントや産後クライシスのように、新たに認識され個々人が発信している問題意識を、総合的に可視化するのは今後メディアがやるべきことの一つ。

③ 女性記者の役割と働きがいとは？

- ▶ 女性ジャーナリストと男性ジャーナリストは取材のアプローチが違う。女性は取材対象が何を言いたいかに注意を向け、内容に合わせて質問する。おそらく女性は女性ジャーナリストの方が話しやすいだろう。

- ▶ 社会が女性記者を尊敬し、かつ女性ということで様々な負荷がかかっていることを理解すれば、女性記者のやりがいも生まれる。#MeToo 運動のように、女性が問題を提起し社会や法律を変えることができれば、それが働きがいになると思う。
- ▶ メディアは、男女両方の視点から報道をし、男女の役割を変えることに貢献できる。政策決定や社会について発信を続けたい。
- ▶ 多くの女性がメディア業界で働くようになったことで、子育て・介護等、より生活に近く、視聴者・読者が分かりやすいニュースを出すことにつながっている。
- ▶ デジタルの配信では、リツイートされることにより読み手の反応が明確にわかる。女性の記事への反応が可視化されて、女性に関する記事が、社内でも通りやすくなる。

手順2 一般参加者からの質問とプログラム参加者の回答（要旨抜粋）

① メディアで働いている一般参加者からの質問

Q：男性の上司を説得するときの戦略は？

A1：会社の方向性にあった記事なら載せることができる。

A2：信頼関係を築くことが重要だと思う。その上で説得する。

Q：日本の働き方改革のメディアへの影響は？

A1：効率的な働き方をするよう、女性記者も男性記者も考えている。

A2：仕事を分担するようになった。属人的な部分を廃している。

A3：土日連続で休むことに罪悪感があったが、そのようなことはなくなった。

A4：深夜会社にいる人は減ってきた。その結果、日付ものの記事が減って、解説的なものなど、まとめ記事や読み物を増やしていこうとしている。

② メディア勤務をめざしている一般参加者からの質問

Q：ジェンダー課題や女性としての悩みをどの程度安心して同僚に話せるか？

A1：#MeToo 運動後少し状況は変わってきている。例えば女性の見た目のことを話題にしないといったことは大分理解されるようになってきた。

A2：私の職場では私が唯一の女性記者。最初はいろいろなことを言われた。初めは黙っていたが、男性上司に相談した。時間はかかるが、少しずつ状況は改善している。

Q：メディア業界で仕事・企業を選ぶ時のポイントは？

A1：最近転職が当たり前で、会社の制度も変わる。目指したいことを重視して会社選びをして良いと思う。

A2：最初の職場は自分を知る良い機会となる。メディア業界で働き続けたいかを見極める場としてとらえてはどうか。

③ メディアに関心がある一般参加者からの質問

Q：記者として、女性ゆえに働きづらいと感じたことはあるか？

A1：現場では、逆に女性への気遣いが過度であるように感じていた。災害報道の際に自分だけ

現場から返されたりすることがあった。

Q：国際政治を報道する際に、男性と女性の間で視点の違いはあるか？

A1：男女で視点が異なることは時々ある。編集者と意見が合わないこともあるが、話し合ってお互いに歩み寄るようにしている。

A2：女性記者はジェンダーの問題を大きく取り上げたいと思っても、男性はそうした問題を重要視しないということもある。

④ 男女共同参画に関心がある一般参加者からの質問

Q：女性に対する偏見のために、思うとおりの記事が書けなかったことはあるか？

A1：男性上司に私の記事のアイデアを否定されて、大声で反論したこともある。その後は、私の考えの正しさを証明する事実を集めて上司を説得することを覚えた。

Q：一般の視聴者はメディアの意見に左右されやすい。誰がどのようにこの状況をコントロールすべきか？

A1：視聴者に多様な意見と視点を与えることが重要だが、人は自分が賛同する意見や記事を読みがちで、読者側にも偏見がある。メディアは読者の数や収益だけではなく、立ち止まってバランスをとることを優先させ、読者もより慎重になる必要がある。

⑤ その他の一般参加者からの質問

Q：自国のメディアにジェンダー不平等があると思うか？

A1：紛争地には、女性は安全上の理由で派遣されない、ということはある。

Q：記者の役割とは？

A1：発生した事象ではなく、発生したことは社会的にどういう意味があるのかを、解説し、世の中の人々が疑問に思うことに答えること。

グループディスカッションのまとめ

各グループディスカッションでは終始活発な議論が展開された。まずプログラム参加者から、メディア業界に女性が増えることで、より多様な視点での報道が可能になること、それによって社会に向けて報道する方法や内容、質が変わり、社会も変わる、という意見が具体例とともに示された。そして、メディアには、目に見えにくい課題や女性のロールモデルなどを社会に伝えるという役割があることが、メディアの影響力や伝え方の難しさとともに共有された。また、多くのプログラム参加者は、女性記者としてのやりがいは、女性の視点やアプローチでより見えにくい課題に光をあて、報道を変え、社会を変えていくことにあると述べた。

メディアで働いている、あるいはメディアで働くことを目指している参加者からは、女性記者としての課題やワーク・ライフ・バランスに関する質問が多く、メディアに関心がある人、男女共同参画に関心がある人からは、メディアとジェンダー平等について質問が出ており、広く意見交換がなされた。

林教授のシンポジウム・グループディスカッション講評とコメント

本日のトピックはいずれも大事で、ここでどれを取りあげようかすごく迷いますね。一つ私から申し上げたいのは、女性とメディアをテーマにしたシンポジウムが開かれたこと、しかも世界中からこんなにたくさんの方が集まってくださったというのが、非常に印象深いことです。

もう一つ印象深いのは、内閣府が今回のプログラムを主催したということです。メディア企業が内閣府の企画した研修やシンポジウムに記者を送るとするのは、私の世代ではあり得ないことでした。私の世代の、いまは管理職クラスの方たちの多くは、「内閣府に呼び出されたから行くのはだめだ。政府とジャーナリズムは距離を取るべきだ」という思考様式が染みついているように思いますし、それは今でもそうだと思います。しかし、私達はここに、内閣府のプログラムで一堂に集まりました。政府の方が「メディアと女性」というテーマを、社や局を超えたレベルで企画し実施したのです。メディアは何をしているのですかということです。その点を一人一人で考えてもらいたいと思います。

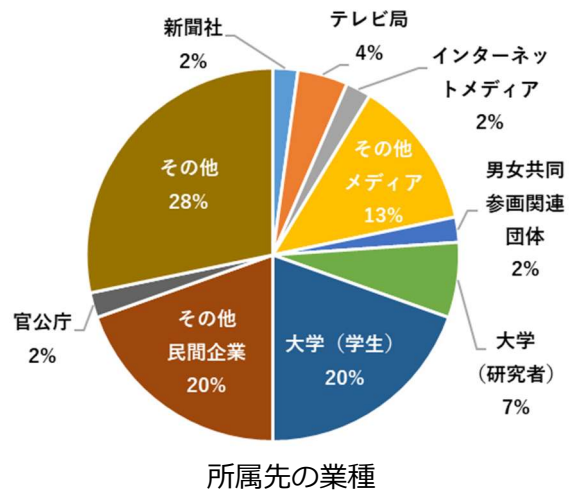
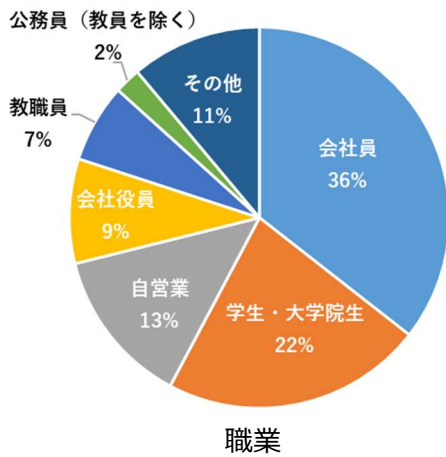
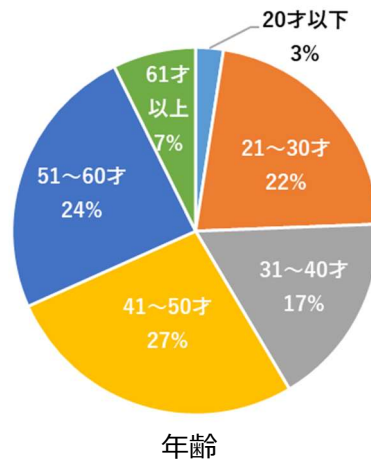
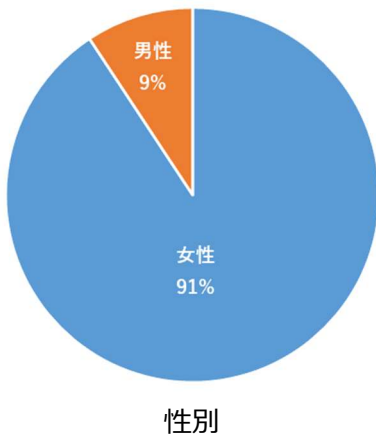
かつては、学会などで「女性とメディア」という話題を取り上げると、「林さん、女性のことなんて取り上げること、偏ってるよ」などと言われてきました。しかしそれはいま、変わりつつあります。私が参加している日本マス・コミュニケーション学会では、2014年に「女性とメディア」をテーマにしたシンポジウムを企画提案したら、すんなり通りました。なぜでしょうか。この頃、安倍首相が女性活躍の政策を打ち出したからです。そうすると、普段は「安倍政治を許すな」「政府権力の監視」などと言っている男性研究者も、「しょうがないな。大事なテーマだ」という風潮になり、提案が通りました。この経験から、この課題をメインストリーミング化することが、とても大事だということを感じました。ですから、私からメディアのみなさんへのお願いです。ぜひ、政権に先を越されないように、今後も、「女性とメディア」というテーマをメインストリーム化していってください。

今日の議論では、昇進の問題、労働時間の問題などのテーマが挙がりました。その一方で、昨今のデジタル化でニュース価値が変わっています。デジタル化によって働き方も、そして社会やクライアントのニーズも変わっています。今日はジェンダーを軸に議論しましたが、変化しているのはニュース価値、雇用形態、勤務評価、昇進といった職業全体にかかわるもので、ジェンダーに関係することはもちろん、メディアや社会全体が抱えている課題であり、チャレンジだと考えています。

ジェンダー問題は、育児休暇を取る男性が色眼鏡で見られるような職場の雰囲気ですと、女性の不平不満のように片づけられてしまいがちですが、そうではありません。私達が語るジェンダー問題は、日本社会の未来、そして私達に続く、少しでも社会をよくしていこうとメディアを目指す若い人達のためにあります。今日のシンポジウムを終えて、私達が自信を持ってそれぞれの場に帰り、これは重要な課題であることを、ものわりの悪い上司たちにしぶとく説得し続けましょう。この企画は、そういう氣勢をあげ、互いを励まし合うための機会だったと思います。今日は多様なバックグラウンドの方達と一緒に議論し、私も本当に勉強になりました。どうもありがとうございました。

一般参加者アンケートの結果

○一般参加者の属性



○シンポジウムの内容についての感想

